

特集●こんな資格でやっています

くらしのお師匠さん

今回の特集で紹介するのは、

わたしたちの暮らしに多くの接点を
もつ仕事をしているお師匠さんたち。

お師匠さんといつても、

歌や踊りの「おっしよはん」ばかりでない。

「……師」とか「……士」といった

資格をもつてわたしたちを導き、

安心やゆたかな気持ちを

与えてくれるみなさんだ。

ふだん直接出会う機会の少ない

お師匠さんもある。

仕事ぶりを「ゆっくりに」観あれ。

調理師・滋賀県調理短期 大学の先生方

めざせ「職人」！ プロを育ててるプロ

調理の現場で働きながら勉強

長浜市分木町にある滋賀県調理短期大学校。かの有名なT調理師専門学校のような「調理師学校」とはちょっと違う。何が違うのかわかると、

「ここに通う生徒たちは、すでに職業として料理の道を歩き始めた人ばかりなんです」

と、先生のお一人、岡本英征さん。えっ、それって、どういうこと？

「学校法人ではないんですね。労働省の管轄で、職業能力開発促進法による職業訓練法人なんです。

この法律は、中小企業の人材育成が目的ですから、将来後輩の指導や育成に関わるような、中堅幹部

となるべき人材を送り出す訓練をするわけです」

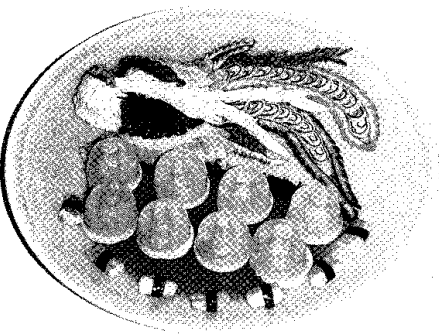
なるほど。応募資格は高卒程度の学力があれば、年齢制限はなし。書類審査、面接、作文の選考によって合否が決まる。国や県、市の補助に加え、母体である滋賀県調理技能協会の協会の出資金で運営されているため、一般の調理師学校に比べて学費が少額であるということだ。

しかし、この学校のカリキュラムを聞いて驚いた。毎週月曜日から木曜日までの毎日、午前中四時間の学科、午後三時間の実習を受ける。二年間でなんと二千八百時間を履修するわけだ。さらには、「給料をもらってるとるんですから、

当然授業のあとには仕事が残っています」

金曜日に授業がないのは、週末で店の仕事が忙しいため。もちろん、店に帰れば生徒たちはまだほんの見習い。包丁を握り、材料をさばくには未熟である。しかし、「学校で教えていることは基礎だけ。魚のウロコをとって三枚におろすまでは教えますが、その先の応用は実践によって身につけるのです。洗いや下動きのしなから、先輩の技やコツをいかに盗めるか、ということですね」

実務をこなしながら二年間勉強すれば、卒業と同時に調理師免許の受験資格が得られる。滋賀県下では六月に彦根と大津で行われる



▶片井秀一さんの「鳳凰美鱸拼盤」

試験に合格すれば、暗れて「知事認定調理師」の誕生だ。

また、ふだん聞き慣れない名称だが、「調理技能士」という国家資格がある。これは労働省が認定するもので、厚生省認定の「専門調理師」の別称。世界的には「調理技能士」の方が一般的で、社会的にも評価が高い。

調理短期大学校では、卒業時に調理技能士補の資格試験も行われる。これに合格し、調理師免許も取れば、卒業後の実務経験一年で調理技能士の受験資格が与えられ、しかも学科試験は免除される。

魏志倭人伝の ロマンを掘り出す

高月町に弥生後期の大規模集落跡

正月早々、弥生後期の大規模集落跡という高月町物部遺跡の記事が、新聞紙上をにぎわした。「物部氏」「卑弥呼」「耶馬台国」などの文字が、見出しにおどっている。このような遺跡の発掘調査をしているのが文化財技師であるが、千七百年以上も前の話は浮き世離れしていて、文化財技師は、師や士が付く人のなかでも普段の生活とはかなり遠い存在のように思える。

物部遺跡の発掘を手がけたのは、高月町教育委員会に勤める黒坂秀樹さん。大学の史学科を卒業して



つ取り除いていくわけです」

環濠で囲まれた大きな集落跡

ここで、時計の短針を二十四時間×三百六十五日×千七百年＝四、八九二、〇〇〇回戻してみよう。ときは弥生時代の後期。高時川と余呉川の間に開けた扇状地に、五百メートル四方もある環濠で囲まれた大きな集落がある。

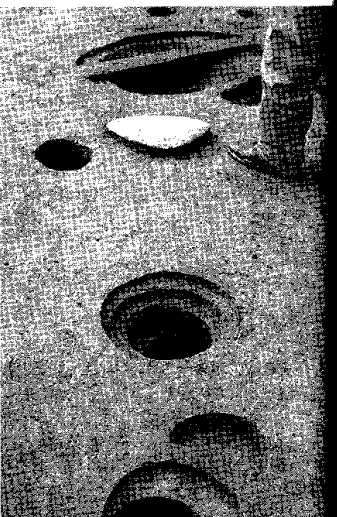
た十畳ほどの床に藁が敷いてある。隅のカマドには甕が乗せられ、壺も置いてある。いわゆる堅穴式住居と呼ばれる形式だ。倉庫は高床式で、米などが備蓄されている。建物群から少し離れて、三重の濠で囲まれた大きな建物がある。この地域を治める物部氏の居館のよう

耶馬台国で祭祀を司った物部氏

物部遺跡の土のなかからは、多くの遺物が見つかったが、なかでも特徴的なのが巴型銅器だ。オモチャの風車のような形をしており、首長の宝器か祭祀や武器に使われた装飾品だろう。堅穴式住居で出土したのは全国でも二、三例という貴重なものだ。

時に見つかったら、高月町では、耶馬台国御用達祭祀用碧玉生産地帯だったのかもしれない。ベンガラが見つかったことも大きい。当時は、器や木箱に塗ったり、鉄を砥石で研ぐために使ったり、祭祀のときなどに顔に塗ったりもしたという。素焼きの土器類は、奈良周辺で出土する壺と似たものが多いという。

物部氏の祖として紀記に出てくる「伊香色謎命」と伊香郡との関連などのデータを考古学的、文献的、歴史学的につなぎ合わせると、「高月町周辺が『魏志倭人伝』にある倭人のクニのひとつであり、耶馬台国、さらには大和王権の軍事、祭祀を担った物部氏の出身地だった」という、丸山竜平名古屋女子大教授の推論に結びつくのである。



ツ作業の積み重ねのうえに成り立っているのだ。縄文時代や弥生時代の歴史は、つい二、三千年前は、はつきりと変わってきている。これもコツコツ発掘作業の成果だと言える。

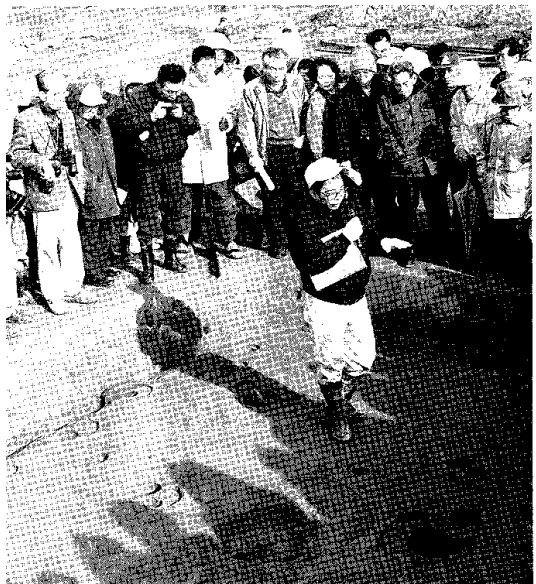
湖北から歴史を塗りかえる発見も

当時の日本にはまだ文字がなかったから、古墳やお墓の副葬品、住居の出土品、貝塚の食べ滓、建物の柱の位置など、全国から出てくる資料について、その傾向と対策といった謎解きを繰り返さなければならぬ。膨大なデータ蓄積のうえに、丸山先生のような結論が出てくるわけだ。

湖北は、古代から生活が営まれてきた地だから、いたるところに遺跡が眠っている。しかも、遺跡がありそうだからと、かつてに「ここ掘れワンワン」をしてはいけない。発掘調査は文化財保護法で届け出が必要だし、専門の文化財技師に任せるしかない。

耶馬台国、卑弥呼、物部氏といったワタワタ推論は、遺跡の土をコテとハケで取り除いていくコツコ

テとハケで取り除いていくコツコ



物部氏の拠点である可能性が高くなった高月町東物部の物部遺跡で説明をする黒坂さん